

揚子江の警備

福岡県 藤丸安男

私がお国に召されましたのは、太平洋戦争の激しい最中の昭和十八（一九四三）年五月一日で、佐世保海軍相浦海兵団に入団致しました。

四月には山本連合艦隊司令長官が戦死をなさると言う悲しい出来事も起きておりました。私の住む三橋町から三人一緒に入団しましたが、二人は水兵で機関兵は私一人でした。

入団前は北九州の八幡製鉄所に勤務し、軍需工場として日夜多忙に鉄の生産に追われておりました。当時の若者の心境は軍隊に召されることが男子の本懐と考えておりましただけに勇躍して入団致しました。

長男の兄は支那事変にも参加し、無事軍務を終え帰宅しておりましたので、その兄が相浦海兵団まで送ってくれました。元々私は昭和十七年徴兵

の第一乙種合格でしたから三カ月教育召集でした。

入団しました当初は新兵として、先輩から叩かれ、しごかれての訓練と教育を受けていましたが、五月二十日、突然現地での教育訓練の名目で上海への派遣を命ぜられました。三カ月教育が前線での実務教育となりました。

乗船を命ぜられましたのは五〇〇トン位の海防艦「保津」でした。艦長は少佐殿、乗組員百二十人位で、装備は二五ミリの機関砲と八インチの高射砲の軽装備の軍艦でした。

任務は揚子江（長江）沿岸の整備でしたが、主に南京から上海までの沿岸警備でした。海のような広い揚子江を航行する船は多く、特に支那大陸の奥地で戦闘を交えている日本軍へ物資輸送するには揚子江は重要なルートでした。それだけに私達の警備の任務もまた重大で油断は大敵でした。しかし奥地に比較しますと治安も平穏でしたから整備の任務も楽でした。

私達機関部員は、船底で釜焚き部員十人、機関部員十人で、訓練も教育も家族的雰囲気の中での勉強でしたから、陸上での教育のように厳しいものではありませんでした。

奥地では激しい戦火を交えている中、私達は中国軍と交戦することはありませんでした。むしろ私共の軍艦を見ると中国軍は逃げるのが実状でした。

漢口から鎮江、安慶、上海と、揚子江沿岸で寄港できる港に停泊しており、中国軍は恐れて静かになる。一種の脅しの役目を果たしておりました。沿岸の港に停泊しますと、交代で見張り役を命ぜられました。平穩そのもので、戦争中と思えない静かさでした。そう言った戦況の中で二回軍艦が沈没する憂き目に遭遇しました。

第一回目は、昭和十九年十二月二十四日、安慶の港に停泊中、突然グラマン戦闘機が襲いかかって来ました。「すわ！空襲」と急ぎ戦闘態勢の配備につき、応戦開始、日頃の訓練の時ぞとばかり

懸命の応戦をしました。敵機は堤防すれすれの低空飛行で機銃掃射しながら襲いかかる。慌てて機関砲と高射砲で応戦しますが低空飛行のため命中しません。パチパチと機銃の音、ピュンピュンと耳をかすめる機銃の音、慌てるなど言っても初めての実戦です。まるで映画でも見ているようで、無我夢中で全員応戦しますが、次々と飛来する敵機に損失を与えないまま、敵機の投下した爆弾が船底に命中し火花と水煙が上がる。

「やられた！」と思わず叫ぶ。命中した瞬間から河水が浸水し、次第に艦は傾き沈没し始める。敵機は執拗に襲いかかる。やがて退艦命令が降り、我先にと河に飛び込み難を逃れる。傷ついた仲間が流れるのを見ながら、しかし助ける術がない。助ける道具はなく、我が身を助けるのが精いっぱいでした。機関部の仲間が上がる事ができず、艦底に沈んだままの者が数人いました。

幸い私は高射砲の弾丸運びをしておりましたので、難を逃れましたが…。一生懸命泳いでいるう

ちに救助されました。

この空襲で水兵一人と機関部員六人が戦死しました。十二月の渇水期でしたから、軍艦本体は水の中に沈みましたが、マスト等は水面に出ている無残な姿でした。機関室に残った者の搜索は翌日行われたそうですが。終わりに引き揚げはできなかったと聴きました。まことに気の毒なことでも哀想でした。一緒に一年半生活して来ただけに残念でなりませんでした。みんな良い人達ばかりだったのにも思いますと、涙がほろほろ流れ手を合わせました。

私は同時に空襲を受けました僚艦「須磨」に、機関兵が一人不足すると言うことで派遣されたので「保津」の乗組員のことは深く知ることはできませんでした。「須磨」の機関部の皆さんも快く迎えてくれました。

この「須磨」は、元々英国海軍の軍艦で、香港で活躍していた軍艦だったそうです。香港攻略で

日本軍に負けたため接収されて上海に曳航され、「須磨」と命名された軍艦でした。この「須磨」の場合も沈没した「保津」同様、機関部員十人が一家同様助け合い、和やかな雰囲気の中での勤務でした。陸上部隊と違い軍艦の生活は家族的だと思います。皆が親切でした。

「須磨」での生活も長くは続きませんでした。諺に一度あることは二度あるという例のように、昭和二十年三月十日、鎮江付近を航行中に、中国軍が放流した機雷が艦底に接触し、突然に爆発しました。私が甲板勤務を交代して、機関室に降りようとした瞬間の出来事でした。物凄い爆発音と共にぐらぐらと大揺れし、浸水し始めましたので「退艦命令」が降り、みんな河に飛び込みました。軍服を着たまま一生懸命泳ぎましたが、軍服に水が浸み込み泳ぎにくくて困りました。

それでも泳がねば助からないので、それこそ死に物狂いで泳ぎました。泳いでいる中に内火艇ないかていが救助に来てくれたので助かりました。内火艇には

多くの人が乗れないので、通りがかりの中国人のジャンクに助けを求め、次々に乗り移りました。

中国の三月はまだ寒い、河の水も冷たかったがジャンクの上でも、冷たい風が濡れた軍服に吹き込むのでガタガタ身震いをしました。この場合も「保津」同様機関室の者が犠牲者でした。艦底が爆破されておりますので、助かる筈がありません。機関部に閉じ込められた七人が戦死しました。遺体は引き揚げできぬまま揚子江の水底に沈んだ状態で可哀想でした。甲板上で戦死した人達の死体は筏に乗せて水葬されました。

先程まで言葉を交わしていた戦友が一瞬の出来事で永遠の別れになるとは、何と無情でありましょうか。戦争の悲劇をまざまざと見せつけられ、今回も戦死された方々の御冥福を祈り手を合わせました。常々は何の思いもなく口ずさんでおった戦友の歌が、真実となつて身に沁みました。

もし東シナ海や太平洋洋上であったなら、全員

助かることはできなかったであろう……。揚子江でよかつたと。不幸中にも幸いであつたと善意に解釈し心を慰めました。

この頃になりますと、連合軍の反撃も激しくなつて来たと、上司より聴きました。内地の港や大連港より関東軍の精鋭を南方戦線に移動させる輸送船が台湾沖でアメリカの潜水艦に撃沈されているとの情報も、我々一兵卒の耳にも入るようになっていました。上官には最も詳しい種々の情報が入っているだろうと想像しながら、与えられた任務に精を出しました。

私達は別の軍艦に乗り移り、舟山列島付近に機雷の敷設作業を命ぜられました。海の深さを計り、その深さによってドラム缶に爆薬を吊り下げて浮かしておくと言う方法でした。それも敵艦が中国の沿岸に近寄れないように、揚子江の河口に入り込むのを防ぐためでした。

三月初めにはマニラ島の戦争は終息し、硫黄島

守備軍玉砕、沖縄慶良間列島上陸等、悲報は続々と入る中、私達は依然と南京より上海間の沿岸警備に従事していました。

八月には、広島と長崎に新型爆弾が投下されたとか情報を聴きました。時折B 29が一万メートル位の高度で飛来してくることもありました。また戦線が狭まり、本土攻撃も激しくなっているとのかすかな情報もありましたが、中国人ものんびりとしておりましたし、我々も軍艦の中での生活でしたから、緊迫した雰囲気はさほど感じませんでした。

八月十五日、公用の腕章をつけて食糧受領のため港務部に立ち寄りました際、玉音放送も聴きました。しばらく信じられませんでした。何故負けたのだろうか、何もないではないかと反論したい位でしたが、皆がっかりしている姿を見ますと、戦争は終わったのか負けたのかと我に返り、口惜し涙がぼろぼろと流れました。その目に浮かんで来たのは、戦死した二隻の機関兵の仲間達の顔、

顔、顔でした。「日本は負けたんですよ」と。つぶやきながら涙を流しお詫びしました。昨日まであんなに張り切っておられた人達が、すっかり元気を無くして残念がっておられる姿は、見るも哀れでした。

とうとう万年初年兵で終わったのか、一等水兵になっても、上等水兵になってもいばることのできなかった私達は、このことも口惜しくてなりませんでした。

情報の早い中国軍は早速軍艦の接收にかかりました。私達が身に付けている銃器類もみな収めました。私物は取り上げませんでしたが、すっからかんの身軽になりました。

昨日までは、残飯を貰いに来っていた支那人から酷使される身になるとは残念でなりませんでしたが、幸い私達は、中国軍から機関の教育をしてくれと依頼され、軍艦に乗り組んだ中国水兵に機関の手入れと振動方法を手をとって教える役目になりました。機関員の見習士官が、日本に留学した

経験があつたため、日本語が使えたので助かりました。

上陸した人達は捕虜としての苦しみがあつたようでしたが、私達は中国水兵の先生として叱りながら指導に携わりました。それだけに心配するよ
うな苦労はありませんでした。

日本軍との戦いが終わると今度は共産軍との内戦になり、時折発砲してくる共産軍に向けて、軍艦に備付けの砲の撃ち方を指導する等、字も読めない書けない中国水兵を叱りながら指導するの
も一苦労でした。

たまたま南京の港や漢口の港に寄港しました折は、在留邦人の皆様の所に立ち寄る機会もありました。食糧は上海の港務部が確保して
おりました。在留邦人用の米を中国兵と一緒に食べましたが、中国人は米に油をかけて食べるので、その臭い
は困りました。

毎日の作業は、私達の言いなりに動いてくれま

したので、肉体的苦労はありませんでしたが、一体いつまでこのままの状態なのか心配になって
来ました。相手は戦争に勝った中国軍、私達は負け
た日本兵ですから、いづどのような目に遭うかわ
かりませんので、困った困ったの毎日でした。

今まで中国人とのいざござはありませんでしたが、手癖の悪い中国兵が私達の洗濯物を盗む事件
が起りましたので、これを幸いとばかり、艦長
と協議して下艦することにしました。折も折、漢
口より在留邦人を運ぶ漁船が下って来たので、そ
れに便乗させて頂き上海まで送って貰いました。

しばらく上海での生活を送りましたが、昭和二十一年三月上旬、アメリカの輸送船に陸軍部隊の
人達と一緒に、上海を出港して博多港に向かいま
した。船の中では食事らしい物はなく、三日間乾
パンばかりで、これには閉口しました。一回二回
は乾パンは辛抱できますが、三日間九回も乾パン
で、その上水もなく喉を通らないので皆困りまし

た。それでも生きて故国に帰れる喜びがありましたので、お互いに励まし合ってじつと辛抱しました。

博多港に着岸しますと、急げ急げと追い立てられるように、ぞろぞろ上陸させられて、MPが片っ端から持っている荷物の検査を始めました。検査の済んだ者はトラックに乗せられ博多駅まで送ってくれました。

二年十月月ぶりに懐かしい故国に帰って来た喜びと共に、身に着けた陸戦隊用の水兵服、駅前に溢れている陸軍の兵隊さん達、それを見詰める一般人のうら枯れた姿、まさに敗戦国の象徴のように見えて、悲しくなりました。戦友とゆっくりお別れする時間もなく、慌ただしい別れも淋しく感じました。

博多駅を夜行列車で発ち自宅に帰りましたら、何の前触れもなく突然帰りましたので、父も妹もびっくりして迎えてくれました。それでも元気で

帰ったことに涙を流し喜んでくれました。母の姿が見えないので聴きましたら、昭和二十年十二月に病気で死亡したことを聞いてがっくりしました。入団する時元気で送ってくれたのにと思ひ起こして、また涙が溢れて来ました。せめて一目この元気な姿を見せたかったと。女々しいと思われながらも、涙を止めることができず、仏壇の前に頭を垂れました。

戦争とは無情なもの、遺骨さえ帰らぬ戦友達の家族のことを考えますと、いかなる理由があろうとも、人と人が戦争をしてはならぬと、改めて心に決めますと共に、生きて帰った自分達が、戦死した仲間の分まで祖国の再建に努力せねばと誓いました。

国の為 生命捧げし 戦友達の

真心刻み 吾は励まん

泣き笑い 共に過ごせし 一年余

河に沈みし 戦友を偲びて